

村回り

初めてのことは、長いようできて、なにかもあつという間に終わる。301番地に朝がきたのも、本当にすぐのことだった。そして、その日の朝は、やけに騒がしかった。3015の扉を誰かが叩いていたのだ。

二階で眠りこけるクワーレンの頭には、ピクランタが鍋蓋を叩いて起こしに来る姿が浮かんでいた。

「うるさい、ピクランタ」

クワーレンは寝返りを打った。頭の中のピクランタは、さらに鍋蓋を叩いて来る。

耐え切れなくなったクワーレンは、苛立ちとともに起き上がって、途絶える様子のない音を聞いた。そこで、もうここが保育部屋でないことと、誰かが家の扉を叩いていることに気づいた。

「チャルー、チャルー。誰かが外にいるみたい」

隣の少年をゆすつたが、チャルーはいっこうにおきなかった。

クワーレンは、扉の音に急かされて、玄関へ降りた。

こわごわ扉を開けると、疲れ切った老人の顔が現われた。眉毛も、瞼も、頬の

肉も、すべて垂れ下がって、くたびれた皮みたいになっている。脂ぎった髪は、申し訳程度に、額に伸びていた。

けれど、老人の身は、立派な金糸で飾られた白い外衣に包まれていた。朝日に照らされ、きらきらと眩しい。

「村回りをするのに、寝巻で行くつもりか」

老人は、クワーレンを上から下まで見た。

「む、村まわり？」

「恥をかきたいならそれでもいいが、私はおすすめしない」

クワーレンは、慌てて二階へ戻り、チャルーを揺すぶり起こした。

「……なんだよ」

「変なおじいちゃんが家に来て、むく……村まわりをするって！」

とたん、奥の寝台からイムサが飛び起きた。

「師の人だ」

彼は、急いで見習い服に着替えると、さっさと部屋を出て行った。「やばい」

「ど、どういうこと？」

すると、マウリンたちも事態に気がついたらしかった。ばたばたと騒がしい音が聞こえる。

クワーレンも、慌てて着替えて、見習い帽子を被った。

「チャーリー、なんか、僕ら、寝坊したみたい！」

「なんで教えてくれなかったんだよ！」

チャーリーがぶつくさ言った。

「というより、みんな知っていたはずよ」

そう言ったのは、帽子をエネーリスに預けて髪を束ねるリリだった。

「式の前に言っていたでしょ。ガブランっていう守りの人が、次の日は村回りだから、早起きしろよって」

「そんなの聞いてねえよ。な？」

チャーリーはクワーレンに訊ねた。クワーレンは、だが、最後尾だったから聞こえなかったのかもと思った。

「どっちにしろ、みんな寝坊したけどね！」

マウリンが朗らかに飛び跳ねて言った。

そこで、師の人が振り返った。

「お前たち、朝食は？」

不機嫌な顔で言われ、見習いたちは黙って首を振った。

師の人は、ため息をついた。

「しかたがない。市で済ませよう」

「市ってなんですかー！」

マウリンが訊ねると、「市は市だ」という答えが返って来た。見習いたちは、口をすぼめた。

丘を下り、村の中心部に入ると、師の人は言った。

「ここは、北熊^{ノール}広場だ。……お前たちは、北熊^{ノール}学領に住んでいることになる。質問は？」

突然のことに、みんなは顔を見合わせた。

「お腹がすきました！」

チャルーが言った。老人は、呆れたように顔を拭った。「それは質問じゃない」

「あの、お名前を伺ってもいいでしょうか？」

言ったのは、冷静なエネルギーだった。

「それこそ、まさに質問だな。……ええ、私は、師の人ドナウト。村回りを率いる。どうぞよろしゅう」

ドナウト師は粘っこく言うと、胸に三本指を当て、頭を垂れる、エイネーの正式な挨拶をした。クワーレンたちも、同じことをした。

「今日は、自然の村へ向かう。だが、早々に計画は変更のようだ。君らは、寝坊助集団だったようだからな」

嫌味たらしく言うので、見習いたちはドナウト師を不満に思った。けれど、彼が懐から硬貨を取り出した瞬間、その気持ちは吹き飛んだ。

「ミル硬貨（一ミル約三円）。使い方はわかるな？ これで、朝食を買ってきなさい。だが、お慈悲はこれきりだぞ。さあ、行った行った」

六人はこぞって礼を言い、さっそく市へでかけた。

クワーレンは、集う移動屋台の間で、迷子になりそうだった。服屋と道具屋、本屋に果物屋。菓子屋と飲み物屋に、魚を焼く店、ウーリンというほくほくの木の実を焼く店。砂糖をまぶした団子を売る店、様々な形のポウを売る店、きらびやかな飴細工を並べる店……。

市に集まる他の見習いたちは、朝刊を読んだり、遊戯盤で遊んだり、楽器を吹き鳴らしたりして、朝の時間を過ごしていた。

ドナウト師のところへ戻ったとき、クワーレンの手には、肉入りのポウがあった。彼は、たれをこぼしながらかぶりつき、ポウの小麦の甘さに唸った。

チャルーはというと、隠しにわんさかお菓子をつめていて、最後にやってきたマウリンは、二色の餅菓子を食べていた。

「さあ、腹ごしらえしたら、もう行くぞ」

ドナウト師は、食べ終わったばかりの見習いたちを連れて、さっさと広場を後にした。けれど、チャルーがあることに気がついた。

「あれ、無口野郎がいねえ」

たしかに、イムサがいなかった。見つからないまま大通りに出ると、ようやく彼を発見した。イムサは、列の最後尾に、何事もなかったかのようについた。

「ひゃあ、一人を気取ってやがるっ」

チャルーは、こそりとクワーレンに耳打ちした。クワーレンは、肩をすくめた。みんなを見つけた時のイムサのほっとした顔が、印象的だった。

ドナウト師に連れられて、見習いたちは玄関口エテリセという場所にやってきた。公共交通機関の駅が集まるところだと、師は言った。

頭上を、舟を運んだ四羽の鳥が飛んでいき、その陰に、クワーレンたちは声を上げた。

「あれに乗る」とドナウト師は言った。「鳥便とりびんは、馬便よりも速いからな」

クワーレンは、心の中で舞い踊った。それは、他のみんなも同じだった。空の旅だ！

仕事人の紋章が描かれた、まあるい屋根の建物が、玄関口エテリセにずらりと並んでいた。屋根の紋章は、鳥便とりびんの行き先を示しているのだ。

ドナウト師は、水草の仲間ラシヤが、星図を囲んでいる紋章―自然の村行きの建物へ近づいた。

中に入ると、ぼんやりとした黄緑の光に包まれた。見上げたクワーレンは、「わ

あ」と声を漏らした。

様々な木の実や、花、樹たちが、びっしりとほられていた。光はそこから差し込み、見る位置によって黄色が橙に、緑が青に変わって見えた。

「ほら、急いで」

ドナウト師は、建物の奥へと進んだ。壁はなく、外の芝が丸見えになっている。その場所には、四つの柱が立っていた。

その意味は、間もなく分かった。豪快な羽ばたきと共に、鳥便とりびんがやって来たのだ。鳥便とりびんは、まず船底を見せながら、徐々に降下し、やがて柱の中に納まるように着地した。入り口に下がる鈴が、チリーンチリーンと音を立てる。柱には、巨大鳥ちゆうライライ鳥ちゆうが、羽を休めるためにとまった。

ライライ鳥ちゆうの背中から、防風眼鏡をしたアベドたちがおりてきた。彼らは、柱にかかった梯子を伝って、休憩をはきみながら。離陸の準備を始めた。

「鳥便とりびん、自然の村行き！ 運賃はこちらへ！」

防風眼鏡を頭に上げた男が、入り口に立って言った。

「彼の胸についている紀章は、なんだかわかるか？」

ドナウト師が質問した。男の胸には、山犬の顔を模った記章がついていた。

「ええと、獣の人です」エネーリスが丁寧に答えた。

「ああ、その通り。主あわじの〈獣ガセ〉を模っている」ドナウト師は、乗り込みながら軽

く言った。「村回りには、運賃はかかりません」という男の言葉に反応を示さずに。

クワーレンは、ドナウト師がやたら急いでいるように感じた。

鳥便とりびんは、長椅子が左右に向かい合わせで並んでいた。クワーレンたちは左側に、ドナウト師は右側に座った。

「なあ、みんな！ 俺に感謝してくれてもいいんだぜ？」

チャルーは、気前よく、隠し持っていた菓子をみんなに配り始めた。彼らは歓声を上げた。

ついに離陸となったとき、大きな揺れが彼らを襲った。ライライ鳥ちやう特有の「ワー」鳴き交わす声が響き、舟はゆらゆらと大地を離れ始めた。

「すごい！ チャルー、玄関エテリセ口がすごく小さく見えるよ！」

飴玉を舐めながら、クワーレンは、なぜか無言のままのチャルーを引っ張った。

鳶の網戸の向こうに、玩具のように小さい見習い村が見下ろせた。

だが、チャルーは、首をぶるぶる振った。

「おおお、本当に飛んでいるのか……。やべえ、俺、高い所、だめかも」

「なんだって!？」

チャルーは、目をつむり、出会ってからのはじめて一言も喋らなくなった。舟の中は、少女たちの騒ぎ声だけが響いた。

しばらくすると、マウリンが叫んだ。

「あれ、なに!？」

クワーレンも、慌てて網戸に張り付いた。

真っ黒い松の森の真ん中に、色鮮やかな小屋が張り付いた、立派な樹があった。

「魔導師の木よ！」リリが言った。

「これ、あんまり見る者じゃないぞ」

そういったのは、反対側に座るドナウト師だった。「心臓を取られるぞ！」

ぎょつとして、見習いたちは網戸から離れた。ドナウト師はせせら笑った。

「あ！嘘ついたでしょ！」マウリンは師を指さした。「魔導師様は心臓をとら

ないよ！魔法動物だけだよ、そういうことをするの！」

「いいや、どうだろうな」ドナウト師は、ゆっくり足を組んだ。「魔導師だって、

心の中を覗く術を持っている。そうされたくなければ、簡単に心を許すべきじゃ

ない」

魔導師の木は、徐々に窓枠の隅へ追いやられていった。

クワーレンは、ドナウト師が魔導師様をあまりよく思っていないことに気が

ついた。ドナウト師は、魔導師様を、魔導師と呼んだのだ。

師は、苛々と、小刻みに足を揺らした。

自然の村の玄関口エテリセに着くと、その豊かな緑に、クワールレンたちは圧倒された。まがった木、まっすぐな樹、太い木、細い木、どれも天へ手を伸ばすように広がり、緑の天井を作り上げていた。

蛇のようにうねる道を、一行はいざなわれるように進んでいった。行きかう自然の人たちは、木の実や花、葉を使って染めた、柔らかな衣に身を包み、腰のあたりを帯で締め、脛に紐を結んで落ちないようにしていた。開いた袖口は、風が吹くたびに、気持ちよさそうにふわりと膨らむ。彼らは、収獲した作物を、背籠や荷車に積んで、玄関口エテリセへと向かって歩いていった。

ドナウト師はこれについて、「自然の村の玄関口エテリセでは、商の人と自然の人の、えー……、作物の値段交渉がされるのだ」と言った。買い取られた作物は、商の人の手によって、各村へ出荷されるのだという。

村の中心部へ入ると、マウリンが上を指さし、「見て！」と言った。

見上げると、木の上のあちこちに家が建っていた。それぞれ橋が渡されており、一種の交通網を作っている。家は、苔や葉、キノコで覆われ、樹とともに生まれ出たかのようだった。

「あそこに行きたい！ ねえ、いいでしょ！」

マウリンは言ったが、ドナウト師は首を振った。

「馬鹿者。自然の人たちが見えないのか。みな、忙しく働いているだろうが。黙ってついてきなさい」

見習いたちは、この師の人はなんてつまらないんだろうとふてくされた。

広場へ向かいながら、ドナウト師は、自然の人について講義をはじめた。

「エイネーは、水産業と共に、えー、このようにして、えー、農業も、えー、盛んで。自然の人は、〈耕しの者〉と、天体観測をする〈星読み〉とにわかれていますだ……。農業を行うのは〈耕しの者〉となっている……。そして……」

講義をするときのドナウト師は、明らかにためが長かった。クワーレンは、申し訳ないが、上手な講義とは到底言えないと思った。着地点の見えないその語り方は、クワーレンを眠くさせ、チャルーとマウリンをお喋りにさせた。ドナウト師は、うるさい二人に何度も注意をする気力はあった。講義をまともに聞いていたのは、エネーリスとリリ、そして意外だが、イムサだった。

広場の向こうに〈耕しの者〉が働く農作地帯が続くと、師は言ったが、そちらへは向かわず、さっさと玄関口^{エテリセ}へ引き返した。

「これで終わりなんですか？」エネーリスが訊ねた。

「ああ。農作地帯には、よくないものがあるからな」

師は、足早になった。けれど、それをマウリンが聞き逃すはずがなかった。

「よくないものって!？」

だが、ドナウト師は首を振るのみだった。

「君らには関係のない話だ」

玄関口へつくと、クワレーンは、自然の人と商の人の交渉を間近で見ることができた。

彼らは、しかし、切羽詰まった顔をしていた。

「これは安全だっていうのか？」

商の人は、荷車に積まれた丸い地の花を嗅いでいた。

「もちろん。うちの畑のものは、全部平気さ。危ないのは、西の方の畑だって。

うちの南は、元気でしかないよ」がっしりとした〈耕しの者〉は、額を手で拭いた。

「だが、地の花が呪いにかかったっていう話じゃないか。……くんくん……。あとで『悪いのを売った』って言われると、こっちの信用が落ちるんだよ」

「俺たちも調べたよ。でも、嗅いでなんともなきや、平気さ。呪いにかかっていたら、もうあんたはぶっ倒れているだろうね」

「だがな、あの話は広がっているぜ？ 地の花は、これから敬遠されるだろうよ」

「だが、三十ミルは下らんだろう」

「いいや、二十五ミルで買い取るよ」

「なんだって!？」

「いくら匂でも、こう噂が立つちゃ、買い手がつかん」

「おいおい、それはないだろう！　せめてもの三十二ミルだ！　こっちがどれほど対策を施してんのか、あんた知ってんのか！」

商の人は、手を振って遮った。

「早く来い！」

ドナウト師に怒鳴られ、クワーレンは後にした。

けれど、後ろから足音がした。

イムサだった。彼と目が合った瞬間、クワーレンは蜘蛛を思い出し、心臓がぎゅうつと痛くなった。

だが、イムサはすぐに目を逸らした。彼は、暗い表情をしていた。

たつぷりとした尾羽をもつ鳥が、一滴の涙を囲んでいる。薬の村の紋章だ。この涙は、治癒の力を持つといわれている、魔法動物〈虹の猫^{ヤークマナラ}〉の涙だと、ドナウト師は、ねばねば言った。

その紋章が描かれている駅舎に向かうと、チャルーは駄々をこねた。鳥便^{トリぴん}にまた乗らなければならぬからだ。けれど、馬便で行けば三日はかかってしまうと、師に真面目な顔をして言われ、結局チャルーは、不快な空の旅をする羽目になっ

た。反対に、クワーレンたちは、手入れされた農作地帯を静かに眺めることができた。

一方、向かいに座るドナウト師は、別のものを見ていた。

人差し指山地と、青の真中山がぶつかるところ、その狭間に、幾本もの白い塔が立っていた。

ドナウト師は、思いつめた顔で、その大魔導師アケラスの、竜の骨を見つめた。

夕刻前には、薬の村へ無事にたどり着いた。

ドナウト師は、今晚泊まる宿を探しながら、講義を再開した。

薬の村は、いたって単純なつくりをしていた。なぜなら、建物がみな真四角なため、十字路しかないからだ。しかも、その建物が、どれも清潔な白であるため、すぐに迷子になった。

おかげで、ドナウト師は、三回も薬の人に道を訊ねる羽目になった。「薬の村には療養所があって……」とか、「製薬所で働く薬の人もいるのだ……」とか、ドナウト師はぼつぼつ喋っていたが、クワーレンとチャルー、そしてマウリンは、今日の宿で何をして遊ぶか相談していた。

とうとう日が、白い家の角っこに姿を消すと、ドナウト師は宿へ向かい、見習

いたちに二つの部屋を与えた。

もう足が棒になってくたくたになっていた見習いたちは、部屋に入ると、すぐさま寝台に身を投げた。

「俺、水虫できたかも。見て！」

チャーリーは靴を脱いだ足をクワールレンに突き出した。

「くっさ！」

すると、こんこんと部屋の戸が叩かれた。少年二人が返事をする、三人の少女たちが顔をのぞかせた。彼女たちは、少年たちのくたびれた様子に、安堵の息を漏らした。

「ほうら、みんな同じ気持ちなんだよ！」マウリンが笑った。

「マウリンとチャーリーは、ずっと喋ってたじゃん。ちょー楽しんでいるのかと思っただわ！」リリは、半分怒っていた。「ああ！あの間が耐えられない！ね、

エネーリス」

「うーん、そうね」

師に愛想笑いをしすぎたエネーリスは、型にはめたように、がちがちの笑顔になっただけだった。

彼らは、溜まっていた気持ちを吐き出すべく、ぎゃあぎゃあ喋り通した。それこそ、自分たちに必要なことだったのだ。

その際、イムサは、一人で食堂へ降りて行き、大盛の夕食を食べた。

見習いたちは、師のいない間、ようやく羽を伸ばせたのだった。